知ってますか
技術の
あれこれ
8

工学の源流を探る（1）

海軍伝習所

三浦　基弘
MIURA　Motohiro
大東文化大学講師

○ 長崎の技術教育機関の創設

嘉永6年，1853年，ペリーの黒船来航で幕府は今までにない動揺が広がった。安政のはじめ，徳川幕府は200年堅持してきた鎖国政策が不可能になってきたことを感じはじめたからである。黒船来航ショックで幕府は海防を焦眉の急と痛感し，幕府老中首座（しゅそ），阿部正弘の音頭で洋式の海軍の創設に乗りだした。幕府は従来の親交から，外交官で長崎オランダ商館長ヤン・ヘンドリック・ドンケル・クルティウス（Jan Hendrik Donker Curtius 1813-1879）（写真－1）に相談し，意見を求めた。オランダは日米修好通商条約締結でアメリカに出し抜かれたことに不満を持ち，密かに巻き返しの機会を窺っていたため，「渡りに船」であった。

オランダ政府は衰退の一途をたどりつつあった対日貿易の推進と政治的理由から開国政策に転じた幕府の要請に応じ，スンビン号（のち観光丸），ヤパン号（のち咸臨丸）の軍艦2隻の註文をうけた。オランダ国王ウイレム3世は日本が急を要していることを察し，当時，オランダ統治下のインドネシア海域で警備していたスンビン号を贈与した。中古であった。スンビンはインドネシアの火山（3371m）の名である。それに合わせて幕府は1855（安政2）年7月，長崎に海軍伝習所（図－1）を設立した。クルティウスはスンビン号の艦長ファビウス（Gerhardes Fabius 1806-1888），ヤパン号の艦長カッテンディーケ（Willem Johan Cornelis ridder Huijssen van Kattendijke 1816-1866）（写真－2）らを招聘した。取締は長崎勘定奉行永井玄蕃頭尚志（ながいげんばのかみなおゆき）であった。カッテンディーケは軍艦ヤパン号を本国から長崎に回航し，1857年9月21日に到着した。そして，彼は長崎海軍伝習所の第1次教官ペルス・ライケンの後任として，第2次教官となり，伝習生に精力的に航海術・砲術・測量術などの近代海軍の教育を行った。カッテンディーケは，2年後の1859年に長崎海軍伝習所は閉鎖となり帰国した。

なお，第1次教師団の団長であったライケンは，「狭く，深く」を追求するタイプで，何事も中途半端な知識を嫌った。一方の第2次教師団の団長であったカッテンディーケは，「広く，浅く」のタイプで，できるだけ伝習生には多くの知識を教授するよう努めたから，前任者とは正反対の人物であった。伝習生のひとり勝麟太郎（海舟）の江戸っ子気質と，このカッテンディーケの大らかさは，何か通じるものがあった

写真－1　クルティウス

写真－2　カッテンディーケ